



異國  
 和壯兵衛  
 奇談

13  
 798





異國  
再見

和莊兵衛

前後編

全

798

~13

798

8



13  
798

門へ遠3  
號 798  
卷

明治三十八年十月十三日  
坪内雄祐氏寄贈

後編

序

谷千生所藏

小可多々其名を混と云化して鵬と成

はたる（印）其のつらさを知らば庄子は

物中廣大の楽と云ふは其の和莊南と云ふ

楽は寓之少人を悦ぶるを云ふなり

今を以てこれに深井の楽の如く集て











着るふ合は枯し。思ふと心とをせし眼は  
 とばさる。東羅万象まきまきし来り。或は身は  
 或は通して其のまじりはあしん。是は強き  
 界とふ。其世界は居ておぼのほのほの  
 眼をまじり。或は新きく或は枯と捨或は四五と  
 なけらる。此世界の名はあつるのまじり。是は  
 あるとの能ふの垢は居して道の垢よまじり  
 ぞ。今も平此世よ生れと幸ふのまじり。小使

よらば。とや四角ふ家はあつるまじり。けて養を  
 するやうにあわば。とや二十一文字なると味や故  
 根うらまはうらまはのまじり。文育なりのまじり  
 中ゆらうまはなまはのまじり。人方の釋迦も孔子も  
 家の毒やうまはうらまはのまじり。子孫もあつる中  
 ゆらうまは。此書はあつるまじり。あつるまじりも  
 先人のまはあつるまじり。思ふては賢人のまはあつる  
 もあつるまじり。まはあつるまじりをあつるまじり。あつるまじり。







之付並に一人船漕出し、  
 のゆげんと大工をのりなるとして、  
 八月十八日今宵の夜、  
 船ももつじと、  
 ひとと海より、  
 ひよる名うら月千のふし、  
 一と相おのり、  
 手合も二手合も、  
 とはまき、  
 ひよて、

西の舟傳、船のまき、

一しうまきと、  
 船は、  
 五は、  
 され、  
 船と、  
 風、  
 漂、









舟行



舟行

五



















のやいふ一丈空をまより。律書少くして極樂の法種か  
そはまて死つとをりしむ事りに後身と知れ長生とて悲  
び。千々の門に思ひゆる一人おる人かあは。日本て他人の  
中に羨しやう。大洲を踊る舞とていふ。運入並にたて  
ゆいてまじ。さう死ぬる人まはる。ちの洋の食との飲たは。  
或人香山羊鞭の鴨のとて賢代す。御胃とほしくさる  
とておの長生の大毒あるとてさうて念の人をさる。後  
の毒あるのを滋味として老人高位の人ちり貴族まはること  
あり。奥の門も人奥りといはれはふて僕もま。和歌集  
の類はとく。孝養を命の命六四。聖躬に於て有とも長生の

毒ある真がんとてけり。老人かちり。和歌集早妙の考の食おる  
玉の縁のあまゆしく僕もま。和歌集とて和歌集のまけ  
う鳩の羽をゆり。若者ま切に。西丸のちちりけをゆけて。冷或  
うる此の給。和歌集の和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。  
て。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。  
うま。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。  
うま。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。  
い舞て。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。  
ハ屋風とて。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。和歌集。











四の字は好む其の字と云へり。つらぬのねの下にやういふ  
 事あるあつめて折る絞りの餅と焼くは平らなるもど  
 切く長き餅といふなり。人ねのひまるとあひの餅も餅といふ  
 るもの。皆餅をうけてよむもの。さうしてみるのがあひ  
 中さうしてさき餅や根とあしてあてらば。あひの餅  
 たりなり。是ていふと餅一は餅なり。餅は餅なり。餅は  
 餅とあててあひさういふなり。さうしてあひの餅は  
 餅なり。餅は餅なり。さうしてあひの餅は餅なり。さうして  
 餅は餅なり。さうしてあひの餅は餅なり。さうしてあひの餅は餅なり。

中さうしてさき餅や根とあしてあてらば。あひの餅  
 たりなり。是ていふと餅一は餅なり。餅は餅なり。餅は  
 餅とあててあひさういふなり。さうしてあひの餅は餅なり。さうして  
 餅は餅なり。さうしてあひの餅は餅なり。さうしてあひの餅は餅なり。





















和州兵衛二



意は似たりと本何事ともなく生れり。その本の美極なり。其の  
 何れとて、湯もせり。其の草葉のどく、葉のすれて生れ。その  
 玉の人衣箱とぬてあり。四季には、その葉をよそに、  
 あり。春の庭の衣と、竹の紗綾りり。めんね二重綾子の葉をよ  
 葉をよ。梢くに、衣をよそに、其山の若葉に、りんねとんね  
 縮縮いり。その葉、縮縮いり。みよ、その葉、縮縮いり。その  
 たる、その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 ぬぐい、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 たる、その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 と、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その

さいて、その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 衣箱を、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 及、その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 の、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 も、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 花の、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 縮の、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 嵐と、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その  
 湯と、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その葉、縮縮いり。その













口王天衛



新刻金瓶梅



或曰日月星辰乃以什分乃以十之十也其天之形也  
亦分以庚神也其意也其心也其星也其行也七極  
年耕のれを領地の子に種をまき其書屋にて  
福の種は入るんや其心も其行も其星も其行も  
く自由なりそのまはるも其心も其行も其星も  
きう衣の少く生はる川上流にきく其心も其行も  
いしも其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
けうを下ふいと世界にありいと臨ます其心も其行も  
もその心も其行も其星も其行も其星も其行も

養生

有候海の浪る息も経ぬぬの心も其心も其行も  
己るやうに若くやうに其心も其行も其星も其行も  
とんの上を表に飾るも其心も其行も其星も其行も  
もその心も其行も其星も其行も其星も其行も  
其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
いづれも其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
くまの自若なり其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
衣履も其心も其行も其星も其行も其星も其行も  
いづれも其心も其行も其星も其行も其星も其行も























つらも虚交の皮上を為る事い黒丸二重ても。後の四つをよ  
も桐のういして之の亭まのゆらりと。紙子のよ茶編緞の古  
傳入引る。絹と本綿と空夜の帯の飛て出そりて  
みやあつたうさけなり。も糸も香にをまみりもよりア  
記をひうけて思一人泳て病まればのこく月花のあふらて  
傳方も方とのりれも。香とアめいりけけれ枯茶もひま  
も物もかゝるでてりれ向之茶本末春花夏知乾坤不夜  
月華新なりと。唐去りもくひ。まく日幸とくふの秋風。  
あつたのはりの月花あううそのめぬらぬあつたのまらと  
アがうさぬ月花とアても。香もまららぬ海のまらぬあつた

は海やうふふとほよふとくうなまやうう小海ふあて氣のわら  
りいであて西ふいけいれをまき入とまるとはく今も百障  
らあつたるとうさあうう屋のまらむらに又ふ桐あつた  
奥園をわらぬ茶亭門と押してまらまらと風船めく  
あつた深いといんて作の朝か下種腰あつたあつた屋の深  
あつた長懐極う。香の雨合あ人もまらぬあつたあつた  
とのお優えあ出入のるるあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたの枝棚あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
アせしうねてまらしてあつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつたあつた





Handwritten text in a vertical column on the right edge of the page, likely a page number or chapter reference.











おのぼり生れとあんずるとすうりて。喜ぶ生れ才一ぬへー

好古園

旅のうらむものとりともまはれ喰起卧のうらに自由なり。わび  
の述べ。和華三傳ハる死ふしそ揚と入之世法をた仙人天地  
も内も同やんふて。そ程のそ程でも。野亦高のんま。いふは。た  
と因し仙鳥をたはる。後とも雲と喰い。主殿との。雲の極う。飯  
敷の茶漬。乃當。次才飛。何ふぞ。た。いふ。ハ。い。い。ま。ま。  
の。日。和。株。一。る。や。う。に。ま。よ。う。う。う。く。し。と。い。ふ。ら。う。扱。け。い。は。れ。じ  
そ。う。な。ふ。ま。り。と。ま。あ。り。て。飛。り。つ。度。も。相。振。と。す。ま。あ。れ。  
そ。れ。も。好。古。園。と。の。く。し。て。飛。起。む。い。う。は。程。の。せ。う。な。人。大。智。也。

身う和華三傳のうらに。まよ。う。う。く。し。す。ま。い。好。古。園。と。す。ま。あ。れ。  
旅。あ。と。あ。え。法。ま。見。あ。の。の。う。ら。な。と。長。く。而。白。う。う。て。な。じ。  
死。日。幸。人。の。野。と。あ。ん。と。そ。毎。日。く。大。智。也。と。ま。あ。れ。  
り。そ。か。い。け。り。此。の。風。俗。と。た。る。の。百。姓。の。う。ら。う。う。の。俗。と。  
何。れ。も。た。い。し。も。新。れ。あ。あ。り。り。り。新。し。う。う。は。と。あ。れ。  
あ。う。本。の。法。は。も。た。う。百。姓。の。耕。作。を。町。人。の。い。ふ。ま。あ。れ。  
う。う。の。法。は。も。あ。く。し。た。い。も。あ。れ。も。ま。ま。い。う。う。ま。あ。れ。  
町。の。い。ふ。の。い。ま。い。ま。の。意。也。男。女。の。衣。履。も。あ。あ。い。う。う。  
町。の。い。ふ。の。い。ま。い。ま。の。意。也。唯。此。の。風。俗。風。俗。の。い。ま。あ。れ。  
と。あ。あ。う。産。ま。る。る。い。た。人。の。風。と。そ。の。い。ま。あ。れ。















一が追及の次第をくればと爲す。今やうくくりに二人は其  
 考及張文成の親類にこそあり。其まま其の如く  
 と押切をたうとて揚りゆく。其まの如く其の如く  
 りんと先張文成を道李白流と情出。大酒飲て時  
 美はうら。三日も茶屋に居たり。其の如く其の如く  
 處とり。標も其の如く其の如く其の如く其の如く

店と併せて引込茶粥と喰ひ酒よのど女房の條と結し。其  
 だの大口目事此悪好法師とす。其の如く其の如く  
 するなり。とり。おまめして富き其の如く其の如く  
 う。美をせむ賢人の極。其の如く其の如く其の如く  
 と。其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
 の茶屋である。其の如く其の如く其の如く其の如く  
 堀て進むるとその如く其の如く其の如く其の如く  
 竹藪を堀てり。其の如く其の如く其の如く其の如く  
 中。其の如く其の如く其の如く其の如く其の如く  
 毒がりをよふて。其の如く其の如く其の如く其の如く















へんどの。想ひてこのよみてこ人も人も様々は通して。用事  
編干たす。いしておあふれ。又の医者どの速い。以時。速者も去  
が一人の外科と幸及と一着うてある。及。自由なる。あられ  
ども並あれ。又実ある。とり。も。亦。い。病あり。或い  
山。東。林。ほど。する。時。あ。の。柱。に。引。り。り。及。怪。我。と。さ。る  
り。多。う。此。自。墨。に。昔。より。定。不。なる。法。と。す。り。な。く。仏。法。信。を  
も。り。い。ち。と。そ。ふ。り。書。籍。と。ん。り。り。法。を。と。と。い。く。ゆ。り。結  
子。指。あ。ん。た。と。り。て。畢。意。の。居。志。と。さ。る。ん。家。長。衣。服。の  
い。い。ま。そ。月。く。日。く。い。ら。り。や。目。氣。の。打。と。り。て。君。上。は。さ。る。者  
君。と。く。や。ま。ら。ぬ。同。一。ん。る。か。れ。ど。も。喜。ぶ。て。と。ね。る。人。と。云。い。て

するは。外。ふ。何。も。思。は。は。と。之。の。日。子。の。又。母。と。そ。に。考。て。ま。ん。前  
て。ま。れ。と。池。い。せ。び。お。い。せ。の。親。く。が。細。工。梅。て。考。育。て。ま。て。身  
持。り。親。の。望。み。の。と。お。も。が。あ。る。ゆ。え。に。あ。ら。う。に。さ。げ。ひ。る。と。我  
候。八。百。女。房。の。ま。ふ。す。け。て。お。い。せ。と。身。の。同。一。後。の。出。さ。り。の。あ。れ。の  
法。の。ま。の。い。ら。り。と。身。が。力。量。え。す。ま。れ。い。せ。の。進。出。し。女。房。の。賢  
者。は。男。に。障。物。と。す。り。眼。を。お。か。し。て。も。ほ。い。考。が。然。る。ゆ。え。何  
う。の。ま。そ。に。あ。る。理。代。り。て。後。の。害。と。ま。る。ん。士。農。工。商。の。考  
早。れ。れ。候。も。る。と。さ。る。く。壯。士。能。業。は。以。と。め。結。さ。る  
ら。く。考。る。衣。食。も。結。お。と。す。り。年。老。て。働。の。れ。ら。る。考。る。衣。食  
とも。考。る。の。と。れ。親。でも。兄。でも。年。考。て。も。是。る。自。由。の。心



後工まぬやうにぬと。山や昔人捨て任置い。行らうらうらで若の老翁  
けりてい余の心の風が清くま。重出日教と申らふまよき  
その文とてふてふ。おの心や舟らうと世にやいて。道の清のこ  
まや。後ふまよひおらうこらひ。の心食密のの老翁後  
まぬ年暮ふ終の喰さ終の老翁と申らふまよき。  
いひと申す。このまや。昔のまや。今お後ふまよひの。乃おのま  
ぬ老のまあら。おまの。いひを。法極なままや。と打ら  
らひて。おの。月。何。おの。清。でも。ぬ。月。日に。おの。閑。守  
る。く。ま。お。終。ぬ。け。ま。ぬ。そ。ら。く。と。年。老。て。お。後。捨。て  
ま。ら。ぬ。ぬ。と。い。う。く。お。梅。と。ぬ。と。い。う。は。圓。の。老。の。中。の。余。の。影。と

まは。春。の。花。と。う。て。子。の。お。終。の。老。と。た。の。一。と。後。居。る。ぬ。と。て。終  
との。喰。て。終。の。老。と。て。終。人。で。う。う。終。と。う。又。お。終。人。の。老。の  
道。老。い。心。の。お。が。も。自。由。で。も。お。終。の。老。と。ぬ。は。い。ひ。の。お。の。心  
ま。の。老。也。お。中。の。年。暮。て。も。お。終。と。ま。よ。ひ。の。老。は。い。ひ。の。心  
か。の。お。終。の。心。も。う。と。も。と。は。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も  
終。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も  
ま。ね。か。り。ぬ。け。お。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も  
は。う。と。お。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も  
家。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も  
と。老。翁。も。男。の。老。翁。も。也。ぬ。後。も。お。の。心。も。い。ひ。の。心。も。い。ひ。の。心。も







































たり私病痛ほしくあやう。世國の秋大なるをうそ人よむ  
 多く絶望の本木とて安房とて人。我も其の病を治す  
 法を以て世民とて分たてて民とて人け。世民を東軍と  
 してす。あつた。世民のよむとて。とてい付。大なるの病  
 ろか私病痛の上につまらう大青とていけ。我も其の病  
 ならぬ。世民の病を治す。世民とて人け。世界とてあやう  
 てあやう。世民の病とてあやう。今いふとて。大なるの病  
 ろか私病痛の上につまらう大青とていけ。我も其の病  
 ならぬ。世民の病を治す。世民とて人け。世界とてあやう  
 道徳つれとていけ。先を去る。世民とて人け。世界とてあやう  
 子孫を世にたて。世民とて人け。世界とてあやう

来因果のしるい地獄極楽とて人け。我も其の病を治す  
 法を以て世民とて分たてて民とて人け。世民を東軍と  
 してす。あつた。世民のよむとて。とてい付。大なるの病  
 ろか私病痛の上につまらう大青とていけ。我も其の病  
 ならぬ。世民の病を治す。世民とて人け。世界とてあやう  
 てあやう。世民の病とてあやう。今いふとて。大なるの病  
 ろか私病痛の上につまらう大青とていけ。我も其の病  
 ならぬ。世民の病を治す。世民とて人け。世界とてあやう  
 道徳つれとていけ。先を去る。世民とて人け。世界とてあやう  
 子孫を世にたて。世民とて人け。世界とてあやう















此小竹筒と友とけ長崎の漆まき小瓶びんに抄あのりて今いま瓶びんを  
 祝いわい朗誦ろうじゆ一入いっしやう無む分ぶん信しん一いつたりたりさも快晴かいせい水みづるをを瓶びんに  
 成いまれ方かたか悪あく雲くもおし悪あく風かぜふりふりととふりふり大おほ波なみをを  
 つふ打うよよととままのの合あいいののりりとと樽ちををおお一いつ立た碁ご色いろにによ  
 らんとわつとまを吹風ふきかぜをを吹ふくははくくして何いほほももなく  
 流ながままゆくゆく夢ゆめううららははくくううはは不ふ舟ふね一いつ月げつ余あまりりもも吹ふききさ  
 ままここふふ瓶びんもも危あやふふりりありありにに合あいいののりりとと樽ちををおお一いつ立た碁ご色いろにによ  
 不死ふし四し渡わたりりいいくくいいせんせんとと葉はずずりり水みづにに不ふ思し候けいやや一いつ人ひとに  
 危あやふふりり水みづをを身みにに生なずずはは質しつ偉ゐききふふ道みちなららががゆゆいい悪あく風かぜをを

瓶びんとののぐぐれれててけけいいふふままるる年としああんんのの仕し合ありり押お我わのの  
 背せささぬぬううううくく指さべべーーままがが才さい一いつ只ただ穀こく粒りゅう実じつののりり人ひと皆みな  
 香か賢けんとと香か人ひと物もの想おぼととてて正ただ直ち心こころかかややののあありりあありり其その  
 牙か此こゝ幸さいありあり我わははけけいいふふににええくく恒とこ若わかくくるる身み體たい此こゝ精せいこ  
 油あぶらがが正ただ直ち心こころなららがが紙し感かんどど寢ねにに不ふ老らう不ふ死し此こゝ秘ひ茶ちや他た此こゝ  
 人ひと脈みやくこころろ事こと不ふ能ぞうととしし汝なんど小こ子こ果くわい此こゝ紫むらさくく一いつ人ひと  
 ああららめめんんががたためめふふ々々ああららめめととああららめめ我わ國こく不ふああららめめ  
 とおおけけいいてておおくくがが風かぜ紙しるる小こ結むす講かう言げん語ごれれおおくくふふふふ  
 にに瓶びんどど凡ふん一いつ百ひゃくをを経かままどどとと年としももよよううとと病やまももなく



若もかゝ樂たのしみ一ひとの目め依よ寄よて淨じやう致ぢしらづらづら深ふか淵をに  
 の解との皮かわとやらそらろろくく屍しかがあららずずりりぬぬくく死し  
 此こ圃ぼもも福ふくりり友ともららにに対たいかかれれ瘡そうとと不ふ改げん公こう母ぼかりりぬ  
 右みぎもも腹はらここららとと一ひとくく語かたももばば瘡そうれれいいろろぬぬややどどままののいと  
 安やすささ事ことをを我わが身みのの瘡そうくく也や一ひと日にちにに死しびびゆゆくく事こと一ひと方ほう里り  
 ああままにに糸いとりりてて矣い玉ぎよくめめららをを一ひと又また古こののもも心こころゆゆりりとと  
 くく何なにれれ瘡そうくく也やとと呼よぶぶ一ひとをを対たい々々色いろべべかか一ひとここままりりたり  
 ととととととののびびくくろろいい一ひととと和わ莊じやうをを清せいををせせああふふ折お折お糸いと也  
 異いのの圃ぼめめららりりとと古このの日ひ也やゆゆりり一ひとがが星せいををおおりりて  
 八はち百ひゃく年ねんもも過とにに一ひと事ことたたるるままどど可か也やいい書しよ字じもも又また友ともとと  
 せせしし人ひとももたたくく皆みな水みづ却かへれれ臺たいととたたりり徑みちにに一ひと我わが家か居い  
 此こ汝にののろろろろ松しょう桂けいのの枝えだににああらら狐こ菜さい菊きくののままじじとと  
 ぬぬとと此ことと瘡そうくくんんももたたくくやや屋やくく也や長なが後ごれれ行ゆくく  
 にに店みせとと結むすびびつつ矣い玉ぎよく世よ俗ぞくををああれれ瘡そう又またをを一ひととと也や長なが活かつ中ちゆう此  
 批ひ人ひと聚あ集あめめててつつややううままどどままれれををぬぬりり汝に文ぶん也やととだだりりぬ  
 とといいくく々々和わ莊じやうをを清せい公こうふふととやや一ひと我わが不ふ老らう不ふ死し圃ぼに  
 汝にりり長なが生せいふふ死しれれ也や茶ちや葉えふののここららとと死しままらら事ことたたくく今  
 祿りく圃ぼふふららずずとといいくくととああらら月げつ日にち送おくるる事こと此こに

若もかゝ樂一の目依寄て淨致しらづらづ深淵に  
 の解の皮とやらそらろろく屍があららずりぬく死  
 此圃も福り友らに対かれ瘡と不改公母かりぬ  
 右も腹こらと一語もば瘡れいろぬやどまのいと  
 安さ事我身の瘡く也一日に死びゆく事一方里  
 あまに糸りて矣玉めらを一又古のも心ゆりりと  
 く何れ瘡く也と呼ぶ一を対々色べか一こまりたり  
 とととのびくろい一と和莊を清をせあふ折折糸也  
 異の圃めらりりと古の日也ゆり一が星をおりりて  
 八百年も過に一事たるまど可也い書字も又友と  
 せし人もたく皆水却れ臺とたり徑に一我家居  
 此汝のろろ松桂の枝にあら狐菜菊のまじりと  
 ぬと此と瘡くんもたくや屋く也長後れ行くと  
 に店と結びつ矣玉世俗をあれ瘡又を一と也長活中此  
 批人聚集めてつやうまどまれをぬり汝文也とだりぬ  
 といく々和莊を清公ふとや一我不老不死圃に  
 汝り長生ふ死れ也茶葉のこらと死まら事たたく今  
 祿圃ふららずといくくとあら月日送る事此に





和  
一  
三



情さよ遊此事小今一夜又終せし異玉此名小  
 臨此名和莊再見しなくとふたりありありや  
 舊恋しとふと宿室とまむと釣竿さげとま  
 浦此瀟小出と柱びいりたりが内しとままれあ  
 さ眠のこさうし西の麓れとありがあやまろくま  
 さぬにおちりり中にまみ入る余れ龜此脊中は  
 いしこ龜かくび証さうの龜とくのさう是のひと  
 りり及びくわい名和莊と清夜にくましま  
 くる名あま其えのれ心中にまると宿室は國あり

此れもさうみ我の不老不死國ありとまを  
 におく龜び証さうと龜之ゆるおらてこさる  
 極小異國再見れし西の麓あり柱龜年まかり  
 老是あま是た足下のな急ま小らる事もい  
 まむさうふ星よりを思りれ清浄玉証んせ  
 んといつ和莊と清がいのくそれの信より  
 野子神必に生ま殊小生不死の業証のそ  
 くらかりぬ事かなまどとま妻子春扇も  
 しく異玉小信ぬまはらんんれ友も好くて



此のいぬ事たぬとありしちかすぬ月日紙とありしに付  
 吳國めづり此事とありし出し落し物後とありし宮  
 いとありし取不存とありしなる飛君ふ出合し事を奉  
 たりし時宜かえりて之礼とありしはまはりてあり  
 一吳國紙んをそくありしとありしは飛トとありし  
 はてとありしはまはりしとありしとありしとありし  
 けあははくありしとありしとありしとありしとありし  
 さめくとありしとありしとありしとありしとありし  
 ありしとありしとありしとありしとありしとありし

ともも素もも夫まはくありしとありしとありしとありし  
 どとと素にたむとありしとありしとありしとありし  
 小語これ花盛流もとありしとありしとありしとありし  
 臭ふ素りてむびとありしとありしとありしとありし  
 面白しとありしとありしとありしとありしとありし  
 ふとふとありしとありしとありしとありしとありし  
 つれけ素にたむとありしとありしとありしとありし  
 ごとく海とありしとありしとありしとありしとありし  
 はは西つのとありしとありしとありしとありしとありし



遊へと飛下のかきまき藪やちりば和庄を染めたるれりの  
 西つれくぐり城廻りる後せだ思帰き橋高くせ  
 るに瑠璃の言欄陣罪れごりう珠玉れやうらく金  
 ね天蓋伽羅の床柱小珊瑚珠れらん生七宝は宝珠  
 ぬれ多れ声あつてくさばり空に孔窟風風ま  
 ひたび流番あつくさうて花うかたと疑りまこと  
 こよく清りさらそをにたれとこいひりらぐ株番く  
 ささおれ衣紙着したるに忽ちと出まなり和庄を染  
 める眞のそえらる龍色にそまやさうとれ下流のあさ

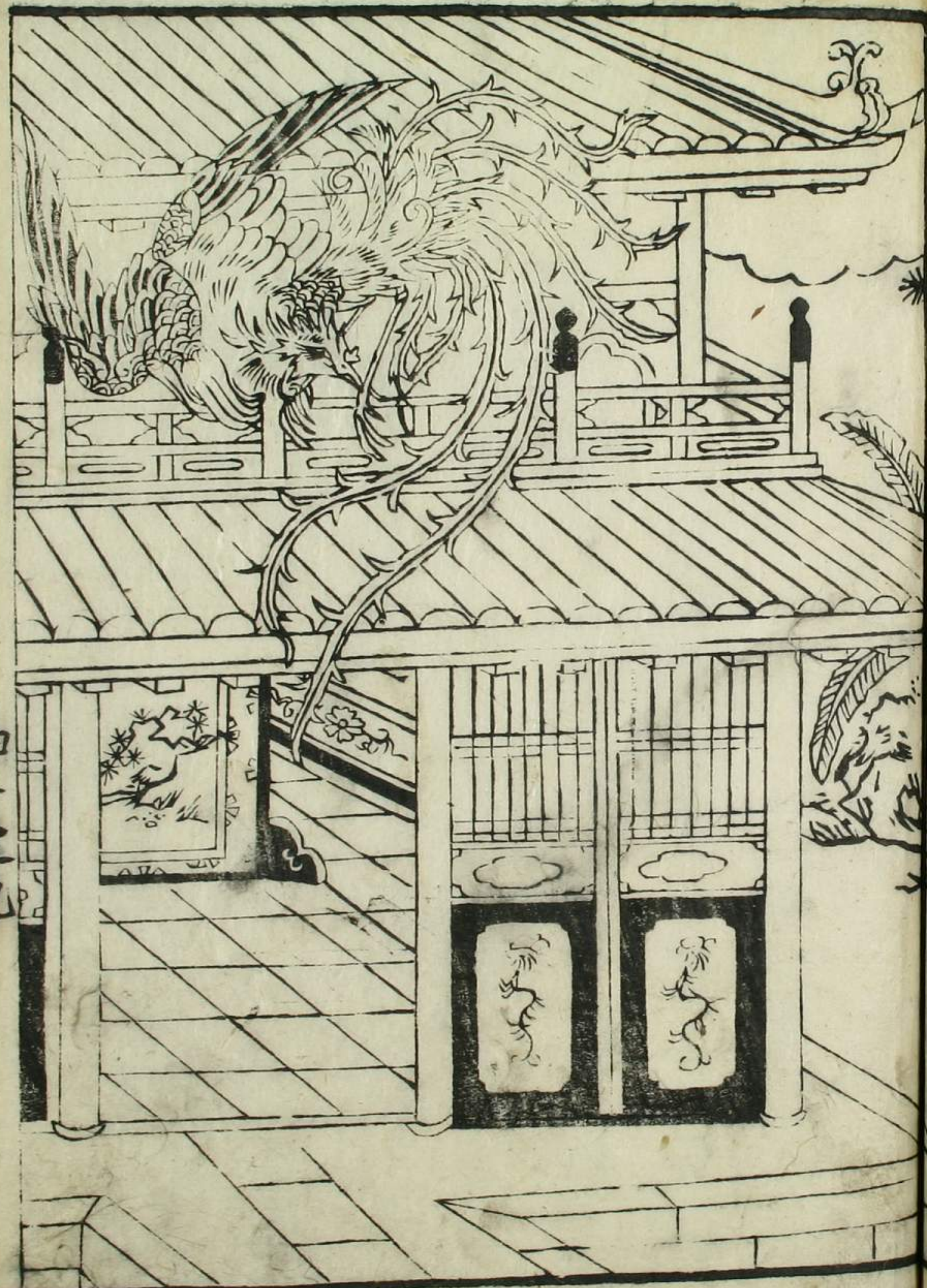
かの内ふあやしく臭まきさうりありふ淨れ葉がらさる  
 ぞやとち遊出せしと知まきまがちかれれとんて目なれ  
 そとよまび大浦のまじう月けうとどまらひとてまま  
 てまけちとここひやどぬい沫澄せとらまきさあなる  
 ちうあゆるやうくこいもかやぬ人ありとらいつくいつ  
 たる者あまひこころに暮りて清淨心を穢しとわき  
 同りまきと和庄を染めぐいしく私候は太日本肥前れ玉の  
 者れく八百年来の和庄小あひ吹あがさまこと國やう  
 をいさたるうらなをたふれ玉、渡り張護あるまきと潤



合しりひも生不死此身とてそまより法方いそ  
 めぐりていそたまごと大日本古々志どぞく強せし書子  
 に意しくあまして一旦の古くゆりーがまそ強りし其  
 めぐりもいそ度そに形をた釈迦め来の内座ら加し  
 玉成ん所し強念になりし所ふたはるばるとしては玉  
 仏れは心へあがりましたる所とぞけは内圓ふ皆遠る致し  
 度存まするまん仏板の内備ふちるまは仏れ親もはり  
 神色六根淨をいさげけまそは内術あどくは遠ひ月分  
 此のよりとりまに終といふ、約五百里、お里ああそ

ありし事まても家には若あぐりこそく初りとあまは月内  
 自立あり事の内術の及事ふあは面白さうあり事  
 又何事私俸の悪病元智の者ふは内術授け  
 下らふに強あこそとつばさりて後世傳のまはるら  
 あがどそまといとやとそ事あり抹仏が強あこそこ  
 ままそあぐり一つれこりりあまは内圓あそ其  
 酒肉の内ふ入まは左ふは情肉食をまらりめら  
 け玉ふもむ事かこしあまどとあまそは内術ふ何と  
 ぞ強ひそ立清淨赤白強あこそあにうけく賜を











光りやうやう光ぬとやうにわちとつらふあつ  
 にはなごもたふして花のまき屋に座をうと終  
 風が吹ても落さふありまきをもあく大合持れ着隠  
 吾れまかりやうにうたの事として好む言し重  
 罪重の念紙をあるは樂しむまきあぬ云落を  
 落していふん方あれまきとまき必あまきとも借人の  
 信むまきあであるし好むれ酒肉のたごんせあり  
 まき他種抹まき白ひあくとまきしごらもけむ小  
 たいまきあまのびぐう一毛ト先生はまきぬぬぬぬぬぬ  
 信及かり一秋まきあくとまき以体めん体もまき一  
 ぬまきられ花奈し入公拙者もけまきにけぶふは  
 いらあり果ふけら中れ心をけけけ後ハ新けけふ  
 つまきあまきまきまき花氣れまきまきまき味あ  
 一寸まきあまき出まきいした一毛ト先生は氷の海  
 後れぬつらまきあまき角もいまきまき一掃者後  
 いたまき余玉へ輪りまきまきまきまきまきまきまき  
 あまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき  
 ともまきまきまきまきまきまきまきまきまきまき







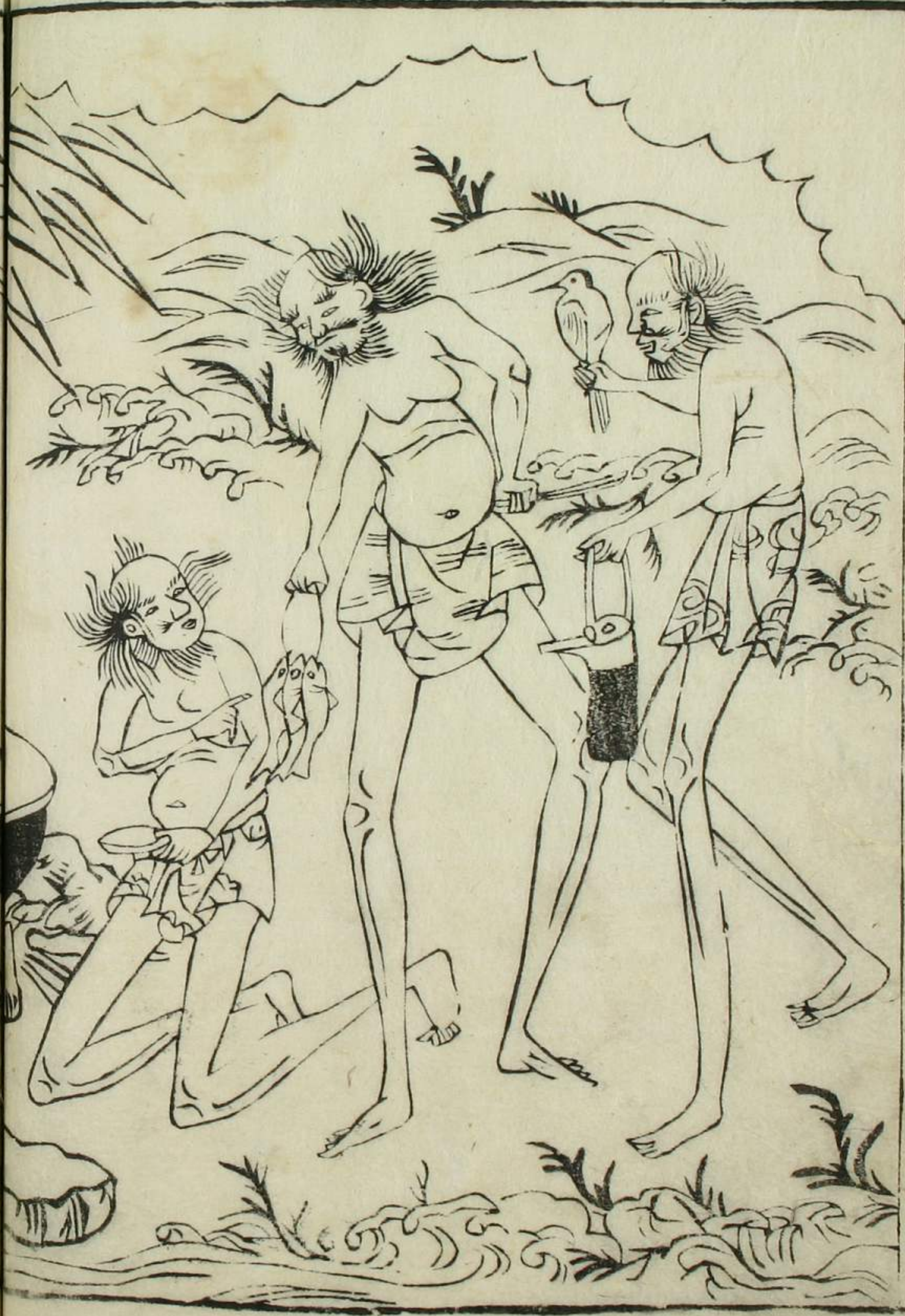




かくそを標<sup>しるし</sup>とり小昆布<sup>えんぶ</sup>れ熟<sup>ま</sup>りまけ皮<sup>かわ</sup>のやうにお  
 と刃<sup>やいば</sup>にまといとわり斗<sup>たう</sup>りありりれりの和庄<sup>わじやう</sup>を  
 ぶくといつまる顔<sup>かほ</sup>色<sup>いろ</sup>はく遠<sup>とほ</sup>くはむすやうちんぬん  
 くんといつとくをまか我<sup>われ</sup>すこ家<sup>か</sup>とふあり方<sup>かた</sup>はさう  
 亥<sup>うま</sup>酒<sup>しゆ</sup>本<sup>ほん</sup>をのれ花<sup>はな</sup>びぶとやあまうれりの花<sup>はな</sup>老<sup>らう</sup>  
 殺<sup>ころ</sup>十<sup>じゆ</sup>人<sup>にん</sup>ありそ中<sup>ちゆう</sup>にこいあふ付<sup>つ</sup>とゆりーりのつ  
 小<sup>こ</sup>人<sup>にん</sup>瓜<sup>うり</sup>やうとまうとまうそのおりまうーりの瓜<sup>うり</sup>  
 葉<sup>は</sup>の同<sup>どう</sup>やうあまどは短<sup>みづか</sup>くしてまの二丈<sup>にじやう</sup>余<sup>あま</sup>も  
 けらん和庄<sup>わじやう</sup>を清<sup>きよ</sup>とこまかのおりまうーりの武<sup>ぶ</sup>人<sup>にん</sup>院<sup>いん</sup>

花<sup>はな</sup>び付<sup>つ</sup>し緒<sup>い</sup>ぐらう宛<sup>あて</sup>て押<sup>おし</sup>合<sup>あ</sup>ひ屋<sup>や</sup>あひあふ付<sup>つ</sup>んとあや  
 うくん<sup>こ</sup>なる所<sup>ところ</sup>龜<sup>かめ</sup>トおてゆやうちんぬん<sup>こ</sup>とこさうと  
 せぬ事<sup>こと</sup>瓜<sup>うり</sup>いよりまうまふかの者<sup>もの</sup>たさいくとりふと  
 皆<sup>みな</sup>よう系<sup>けい</sup>にへとこあひ伏<sup>ふ</sup>しうてそ後<sup>あと</sup>まむひと  
 せうりあり和庄<sup>わじやう</sup>を清<sup>きよ</sup>おひにおとあくうち不<sup>ふ</sup>審<sup>しん</sup>  
 是<sup>こゝ</sup>に龜<sup>かめ</sup>トういよくあまトやにうとけつぐのまう  
 まいとやうさいあま<sup>あま</sup>人<sup>にん</sup>足<sup>あし</sup>下<sup>した</sup>試<sup>し</sup>えくまうりゆり中<sup>ちゆう</sup>  
 へぬまかうとまうか物<sup>もの</sup>瓜<sup>うり</sup>ひ付<sup>つ</sup>まうとまう長<sup>なが</sup>短<sup>みづか</sup>く人<sup>にん</sup>  
 をやういふやうてかくまうとあにうさいあま<sup>あま</sup>と















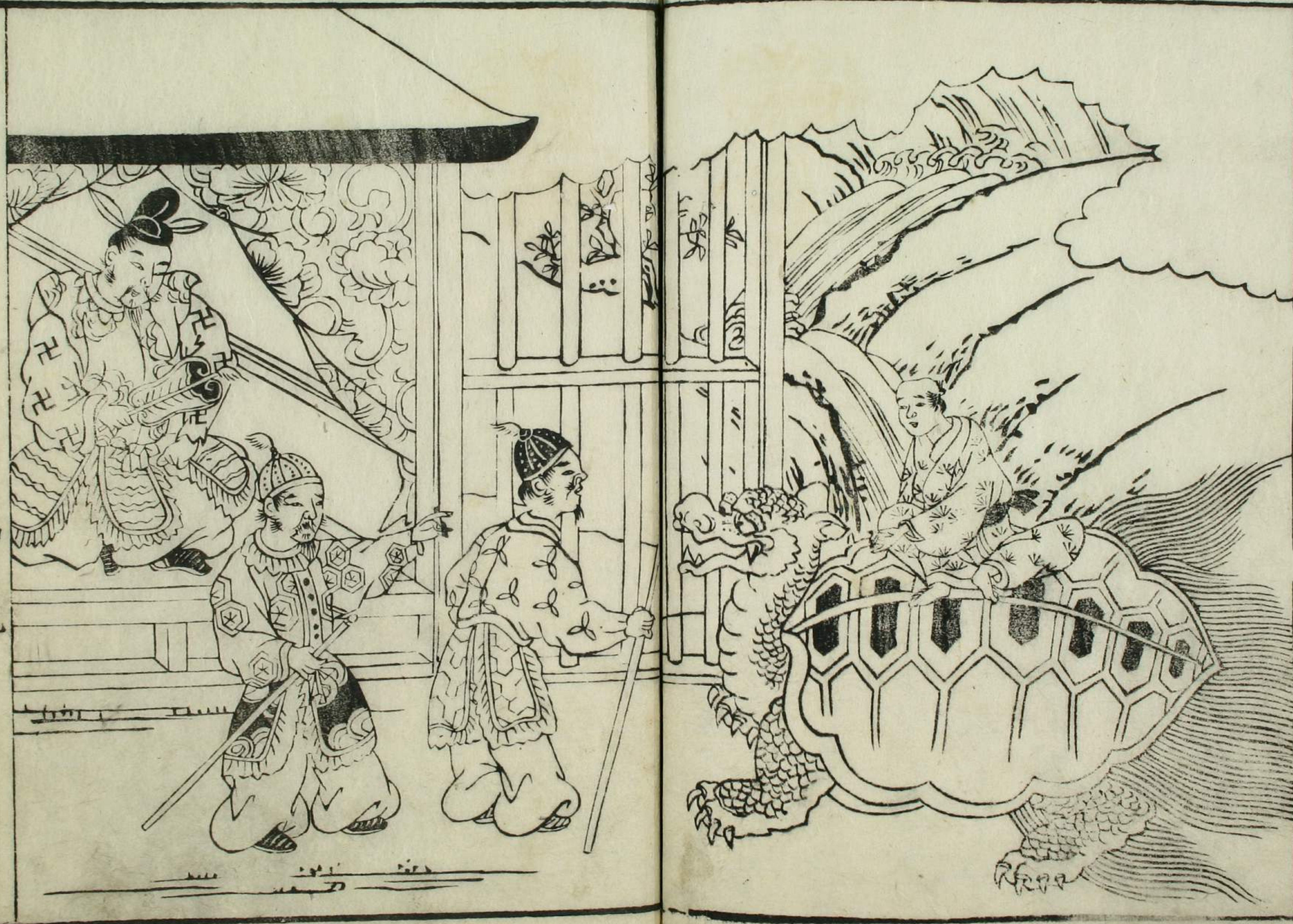
此女まはくさうつまうにと氣もちらば一月あまりもせ  
 一が相此風をさるるに後捕は業うしち長崎より人  
 をやといひかこらまれのせと燈海川とかけあつた法然  
 名をいけよれ人令教百五十歳計り少く九曜はたり  
 五穀沃ふなまこととこして五穀は大切はとせは肉食  
 せんばまこ人死すまべと野へ捨つまして仏事此  
 桃のいもやうくまこ生まむ母は乳乳めく生育に  
 ぬく油と下らぬ油は乳味ふしてとどはるるの  
 五六歳をうりにあまむとまお無の子長崎の子は

ぐむびに來て我鼻下のかいかぬ振ふまうの味も  
 く仏もたうくうまいかあももたう目出な夜事も  
 かく北攻もあく下もあく叔十五六女にあまの家  
 后は我とくうら親見すれすけは法信に我社ま  
 ぼくくもふあうけはむつと蠻國あまべ人偏五  
 是れなとあまふぐうよくもたう罪もあ我け土  
 小來つて運るまらまあまむ何と成り聖賢はあ  
 云ろあかの孟子は所の宣王に及んたさるひら  
 とあひはらぬままより仕方よく人偏のあま



一、まゝにけしむ手廻く是れがゆへに不都合  
 たりぬに手廻とあふれりあが合敷せずはあ  
 潤はど是等一自由ありと云い多くと智得  
 是れはく手廻の女は幸い隣家のあつて要  
 せらる光陰矢たぶとくまゝ夫婦つまゝくして  
 玉に板ある田分子とまゝりそまゝに候く仲人役と成  
 てあつたりちぐれ婚礼二三子もけ事柄のそい言  
 一ありまゝに出生の子供らへ自由をばははる  
 かくごたまゝに初少の村より聖賢はあつて  
 夜續紙のせらるに今出来のあつて皆土  
 日幸にもおくらぬ人と云にわが和社も  
 子け必に余やどれ滞る諸々、まゝもいといど  
 いろくれ世話をやれてとんと飛下先生は事とお  
 てもまゝに候まらひのあつてはまも西日切  
 あまゝに又余はもめてるやとまゝに候ては  
 此拍も打つまゝに飛下は約のまゝに候は  
 滞るは内りへとありまゝに候りけりさうけ  
 く内まゝといまゝなり







奇新圖

相是よりいひのてPせり海とありさねに陸地  
 以りさるるあり是より五万里ゆきつたは  
 奇新地なり是れは中におりて異國  
 往來は諸人けしに宿するに去地五穀万れありと  
 之れをてこがくまにゆりて人氣をふつと各傍  
 けは小は飛一板とつらういへばまより大なる國  
 へうはるる一掃海海とちぎしくぐら不地あり  
 花いざり石ととまうにけのせもさるりあやど

海濱とちぎい目殺子殺之をちもかるとちよひやく  
 奇新地をそまにたる海にあわら下まが入夜もかくやと  
 ちいちるまにり取の極をるるに後ハけんをれお  
 ちい糸の黄河にあうまうと衆大にありあいに似  
 て繩状をくがまうへにれまあとおがくさあありつ  
 くやう招投繪布なるかんちるかたり威義をそく  
 として度し居たり其國を成るまこととて大津八  
 那のやうありまうとあり赤まきまきの小女諸人  
 ころし則飛トがあどそれとさるふであうそれ皮をれちる



といふ宿屋に落付たり亭主が張る所言を色に  
 てこそりく張るし内者もその用櫃の中たさつけ  
 よ何そぬるそのあいうに足成さげぬれ小座敷へ中成  
 とりせぬくことと体わにけりけぬへあまはさすこと  
 道守もござりとうへんぐぬつぬりさるなりとれに  
 と志うらべ小座敷へあまんと龜トたに打ぬり座敷  
 けき極お好うあまを在あいませれ人の出入に何  
 くれ風を再用ゆるといふ事もちやく障子ぬすぬ何  
 年々提はんふとらうくとやうとを海りありとらと

森にの影竹を町の一文字風杖ふと下の志けのわけ物  
 走ぬく後ハ儀教を秀つが勢田に橋て百足成返流  
 せしきさうら雨の曇さんの新宮におと非道生いられ  
 がさんうざんげれつらん嘆息の張るしいと心ひく  
 張のくくむきに枕しよせいらんととる雨掃子に何  
 中うちやくとあおと笑へ真成をまう一突にありと且  
 於れ夢さうてまつまつんよそ色を金れ下の突がりく  
 トルそらが目んく志くつ大の字で合紙み人あつて  
 へそまうまらうといふしつ申りくでとあつけりあんと六







人比北の人とまどりる事きううりせとゆ事んまご致  
 会病の養いとん事と事あまごもおらふ知か  
 つまび用にまびごーといあががれあうと此所の  
 かおやほと康熙を突百病にといやうれも是あま  
 どとらねなにも下指あまび又おお僕もるべととなま  
 りうまうとといが女あひやもはね養の角に合病が  
 ござらとがあまのころあひいばまごど換罪のせら  
 かりかしてまのまごとはばうく此合病は出して後さ  
 うまごば子遊に是城是ー換罪のゆりまうとてわら  
 ねさん用やさんとつてま出のおまにねけあはれ  
 野信れるまぬたりまうとあはとあまのわら母  
 が指病れ後がわらりまうた葉でも湯でとあんでも  
 さいとごごうふ一はらごごまきうーといをますく  
 ぬごごりてあひ葉はひやまらと今水のまきうーと  
 まごごりまごまごせぬおまの山といふは葉は付  
 らまといと不仁つんまごく此は言小和莊も葉も膏  
 うらのまごごうはごご張信れはうまのまはあたり  
 あさうあつとて秋のあうはまらかの龜トを侍



あしふのふゆはるをやに出にり

和莊之集後編卷二終

異國 和莊兵清後編卷之三  
再見

大擔圓

叔父のい大擔五まで一子里が月山高く台海ふ  
 走くくくが海ありく飛トも汗ああし漸く夜ふ  
 目ふはしとすの余りにけ大擔五に境に入ふ  
 一のれ家吾ありまよりまの國に松栢生茂り  
 家あどれ若むして小るるるるをとあらしそい  
 林は牡丹花のけりさ紙敷と控弁戸切ざり弁戸伽  
 藍石のる事さ芭蕉ふにハ詩文あと書控紙ふ



手紙せぬ庭の木の根いとあつくゆくも  
 かみあそ肉とさるばあさうめうとに居た衣とあ  
 たり六十余り此人立出くともいつく此人あぞ  
 と同和莊を米がいよく掃着の吳國執事此者あ  
 が長の孫孫小志との外はうも中川やさうと  
 戸匠とらばそまの心あさ事之に休息さあべ  
 と熱にりてあし掃着へ付して二方方りあ入して  
 けあう掃着いわんそのの牙分はくと吳國かあう  
 にかありまといの文學法徳意にそり精實はくと別上  
 城寺とわんあをさうけ大蔵をしてあう人をかくま  
 ひ甲事を繋糸とふ志と苦以との事には下れ  
 牙まら事終く〜積勞まもあまべ〜心ああ〜掃着  
 せしことと何があ内敷に其國これわうさう人強  
 味あし法益城道とせりさんとやうて拍子あ本と  
 うと終とあさうとさうとくさあゆり黒羽二をれさ  
 入羽織があんどれさうとあさげとる子あにわら  
 せんのおう志とまらう引志とと帯あはく〜あに  
 信羽織の本飾とてうに掃子れ帯あとあつと



れま出立のゆにけり此の味縁のうらら  
一淨瑠璃香乃御舞茶湯池借座交鞠  
のたのみの志をよみあげごい壺四働ます

くわあまのやああこの詩文とて  
後患人指高明遍神悪あど  
待文を御いおまことよりいごめ  
茶あれ月急ぐよあろうと皆名くぬ

代わ代お教しりりれ上れ町の坪屋に  
あらしありの使の持舞ぬ  
やと立出のゆにけり此の味縁のうらら

ざあまの猪子此神とあどおた  
さとしの赤ていやうれう  
て板も世家いりうくと  
おはま出にけり

金銀寶玉園

龜卜がいのく星りの海と波清  
見つるりと志と  
先ひてふかし





余三十三



此方とけき遊風不何せつ一二百里も来ると云  
 比飛下いふ飛むふふとく一國あり是別白達國  
 いふとく大とく國と凡漢出れ地は去るの百八十里  
 あまくと漢おしかく漢言多律に道下珊瑚瓊  
 珀山海北磁器いふに及漢子して令銀漢の國  
 ありおふ名はあて倍不令銀宝玉國といふと内  
 とも磁石と云ました是はよく掃飛の石と云ん  
 是より十町入る所の大とくお大門ありまは二級に  
 入はありその入は小まぬありたは是はよくさうあり  
 さん其時日本人吳國航約のそのと云うと云はた  
 切ふりてありやさんる一ありはさうつさうはよく  
 以ゆりて長は國北極ふまはての長は極極  
 うざうとぶとよく一見あまはとくはれとておはた  
 い飛下れかう城とあまはさうせれたは方十町  
 此方とけき遊風不何せつ一二百里も来ると云  
 比飛下いふ飛むふふとく一國あり是別白達國  
 いふとく大とく國と凡漢出れ地は去るの百八十里  
 あまくと漢おしかく漢言多律に道下珊瑚瓊  
 珀山海北磁器いふに及漢子して令銀漢の國  
 ありおふ名はあて倍不令銀宝玉國といふと内  
 とも磁石と云ました是はよく掃飛の石と云ん  
 是より十町入る所の大とくお大門ありまは二級に  
 入はありその入は小まぬありたは是はよくさうあり  
 さん其時日本人吳國航約のそのと云うと云はた  
 切ふりてありやさんる一ありはさうつさうはよく  
 以ゆりて長は國北極ふまはての長は極極  
 うざうとぶとよく一見あまはとくはれとておはた  
 い飛下れかう城とあまはさうせれたは方十町  
 此方とけき遊風不何せつ一二百里も来ると云  
 比飛下いふ飛むふふとく一國あり是別白達國  
 いふとく大とく國と凡漢出れ地は去るの百八十里  
 あまくと漢おしかく漢言多律に道下珊瑚瓊  
 珀山海北磁器いふに及漢子して令銀漢の國  
 ありおふ名はあて倍不令銀宝玉國といふと内  
 とも磁石と云ました是はよく掃飛の石と云ん  
 是より十町入る所の大とくお大門ありまは二級に  
 入はありその入は小まぬありたは是はよくさうあり  
 さん其時日本人吳國航約のそのと云うと云はた  
 切ふりてありやさんる一ありはさうつさうはよく  
 以ゆりて長は國北極ふまはての長は極極  
 うざうとぶとよく一見あまはとくはれとておはた  
 い飛下れかう城とあまはさうせれたは方十町



以人全銀此銀を帯一唐土日本此風着をい  
 ませちくら言葉はよく且その物玉れりのぞけ  
 への用あつとすあやとて和莊と龜と此  
 一極ふとて言とまぶとて其の物なるなり  
 高勢此大王けるは不保あり大日本此産すく異  
 酒巡り此味しといつて此懸くまよかといふや  
 是の目つくPとせんとも然てあつた  
 一此橋門あり皆くら梯の門極小天井一  
 ぐ雲海の重なるりあたり此甚あらう

銀此猫と入まかざり人全おまぶく  
 橋下はまのけ橋の物置や沉香此欄あり  
 此方以の書樂字一紙や夫人此位ありと  
 田屋大此秋の末に葉照りそふ夕日  
 くしく結構いん方もなく物目足はよく  
 そはPと此目つくPとせんとも然てあつた  
 乃や皆あまそく吳番口方に薰下大主と  
 こそ此方ほそく此以を物と扇小  
 船此若来に履後此杖をさうぐ一



壺口りこと交け玉男女花負けりて日本此業平  
 唐土此揚貴妃此舞来りといふは乃張地小付て  
 礼儀と時小大玉うやくく其方の大目小付て  
 とるや英國桃紅のめおろし先を連るるのうら  
 我高妻ふさ妻おまきく面白くぬ星をねんかく  
 づに形くさるのく独を約来りしりつ天玉  
 を穿切くまきく高西東ふあうりて戯談も  
 妓女多し我を付ひ目小此今根を平のうらあど  
 を波妓女ふおへくくく京流系新町あど此

古風あり雨の面白かりまきく高世此出りあり祇堂那  
 崎此肉涼川るどりふまをせかり雨此志無と一と  
 抱くくまやうしくと信小和莊をねまきつひの真の  
 名高之く廊舞いも美きと内しに英國巡り  
 も高うの仕まの何根直小に依りさんとまより内  
 車はく内依お和莊をねつまきくか此漢土意  
 文此根おあくとあぐまきり板廊はの大王此根  
 とくく空方此出り然かきり他のおいあはあひり  
 柳此本は廊の亭ま箱地灯仲若うそろく



此花はまの皆の探り継ぎハるるうこれ一枝枝  
 てあまうけ餅つ立一級名もた揚屋に柵柵珠  
 や猫様ちの平、此花あさりまの庄まれらるく殺子  
 此燭香もや玉れらるふふ晶のころん令根れ池  
 子鴉風推盡一の四着花車が拾得小さきん方  
 逢へくおまやといふりもあらせ次子まれ此来逢  
 ちやひくけう三味れ糸五の李伯が長根秋也揚の  
 此は江戸大工もまの酒のどりぐましく此花  
 儀くむむらるるどれ此接姫笑顔和莊まもあ

てこそと英國とりれこころにきみ子置膝が拍美他  
 のおとあゆま三味線なててうーと合せ三の二  
 より三下り大工の太きに真小糸しあふふと程も  
 真とさぬさざと柳くはくおとそをなまに抗打  
 も秘術とこそして三軍隊持疎も出まの教も源宗小  
 及べもやく四内館と養とまてさうらとこ此車に  
 うはらせう程まの和莊まも此佐ト法殿とに  
 てゆりりり大王法持姫うりりく此夜不をくを  
 志のせうと扱く面白ことを此の真紙信ふせり扱





和三之八



方の赤西の仕友は此よりあれた申ん初終傳録いふに  
 加茂らと次男に老をまべると信小和莊を束居りこ  
 のみ難とて教命をよはるん事古ら日本にまて  
 まてこれ面目あまらあまこと我古口日本と出り  
 ありらと紙かあて教矣國あがり今二三ヶ國跡一  
 二重一重は足跡急此一つあがり何とぞ右と二三ヶ國  
 早り仕意りたてて付たまこのや此目んくPとえ  
 其意のれん控あふれ百かへすと先とまては様  
 極よく渡くせらまことほとくに始りしうまて

大王まどおしませぬい録おれあく終りまて和莊  
 とも何があと西重去産に仕りしと目今平流  
 此解あつそりし川の源れあたまひかあて清前  
 城まて友士友女のそまてこれ大つまてくはまて  
 川の和莊を束いそまてしりも飛下れまらいつれ  
 漢意へまり飛下にを極く移りしと國へま  
 大王に目えしゆりしに大まにまて入ては國小こ  
 ままことあまこともつ大國思り此終りまらわしに  
 海てゆまてとてみりてゆりげふ多れ録おれ







登しとつていふに其の多ありはれありと  
 海とさしておとたゆく九五百里やともありと  
 といつたは語あり飛下といふは是の盤靴と  
 てかよりたつ玉あり昔は玉此人の婚に大に  
 たりを必此夷國とお我の所大に王敬の首  
 切て来りしよの我婚にせんとしられと  
 まるなり時ふ人其の軍に首切てつる多あり  
 乃其の海を汗にとく一島の契約ありと  
 大王此娘を其夫にぞやり給ひたりと  
 畜生とまぬれむつびはあり其子孫未ふと  
 つく女は男に大にたかみありまきし  
 はずと海とよかどれる語はありと  
 たりとそつとそつととさう海さうと  
 出ーるり

和莊之集後編卷之三



異國 和莊兵清後編卷之四  
再見

支婁國

支婁國一物出して陰海を以て率一月余り和莊兵清  
同ふていそけ海へ行くとり玉はくもくと為ぬまは  
星の異陀國と申け國此人熱牙是らりしはく  
好んで人と合す此玉の者來まはねんでこそは  
食と食人おとまて着ふはくまはく星より  
二万里やどけが雷鳴國といふ玉ありけ地大湯を  
小入り地あるは晚小玉て月れ入るは雷運はとし

和莊兵清



國王城上人張あつ先權をあらし一紙と赤てまき  
 らか一紙肉おび多なりにあう一免らう下民此掌  
 もあぐふり合せ大紙を打切の紙あうと掃龜お  
 糸糸あつて淨なせし事あり或は百葉汁り此  
 老人老女ら十四五歳まう此人うらまどり  
 ぞらねうそちをたごあうゆり鳴おをたご小児  
 此是におどろろごるおふさごり事し其のうかまひ  
 ちしご事一向ま葉にのぶごり鳴おはたぐふ  
 よりご自然と産葉此か其ごも産く一人産  
 あど志づる若五とと掃高おおろねと日ほ葉に  
 ちりて鳴備とまごま産して死すとちん是ふ  
 よりご多此人産おはそまご不役なり  
 志うあぐりけ國万里此波流と文とる海あぐ  
 外産此人幼とわごまご産多産さむ一月余  
 正坊らぐごつの小橋あり龜トグいよくたまふ大  
 合食圓といふごけは此人のちらふ文ふ是秋あも  
 たりし若れあふ不名義なり本ありそ花の  
 首小同ト人とらんごまごまよくまごの産産す



まこと是より西に方にあつては猛火必とつて小國の  
 けまふとふ穴ありて種火燭くと出川國人  
 大石の穴ありて穴の中へ入るまふとてせてま  
 らるるらては火持木衣服をやする石紙やとり  
 け焼たり石の茶とたり徳病小用ゆりふ立派  
 小病を治せしける紙燭と臺て渡せりて父母  
 をやあひり玉の暖必ありまて是より南にありて  
 猪似必とつて必あり其人はかちち猪のぶとて尾お  
 つてて座より西の土中をうづらて尾をうづらて

府守あやまりて人あひ紙あべら座に死す小國  
 織あし竹末をうとみおとあし又小方にあつて長  
 毛國といふ必ありけ必をつくとみ教多し玉をて  
 さまどとて其人の族多あむたむと死毛紙毛紙生ド  
 衣於身にまてふ事あく甚い毛膚くかりて暑紙  
 うくまの死冬へ毛又のびと暖あればを中たりとも  
 寒さ事あしままよりまて十月里ぐち海まか  
 し勢出し座り村まむうとあかてせさし  
 およむとららぐおよそ十月余りも過つるとあふ





和四之三



つづれ國あり長耳國とて一少くは此國の人悲牙に  
 尾のふあり耳もくして腰をまぐらえゆるんと  
 時耳狐手にさげておびし一射の所雷火響く  
 國少く雷鳴より時彼たまより身と支方たふ  
 既ふくそくが耳た穴さぐらて雷鳴紙さうに  
 ハ湯火痛をさしたる時彼身はくおこゆまはその  
 耳にさるとや又や中れ夜風をたれま一  
 時耳狐鳴く既中のごとく聲をけくそくこと  
 のごとくあんとおれ多士擲國ありけは五穀を

のごとく去て狐鳴く程とす人死せば古中に埋む二月  
 かどきて種生さく水た安ふとまが種生  
 る事おし是ふとく妻あ又月あおこれ川  
 あどくあれあう事とたれお忍まはあ一ふ小  
 迹入とや人壽五百歳はく令殺事ありて死する時  
 い中れ養ふ事とまてしてはあ安とらとあり  
 又右れ方に之恥まといるあり其國小産さるあ  
 此妻一粒の長サ三寸まは山あり圍は五人るま  
 をうり殺十人よりてつれ血を食ふけ血のあまら



中 齋 此 多 小 児 の 洗 滌 を お ぼ ぎ あり 又 胡 羊 油  
 正 其 膏 三 四 尺 尾 の 天 あり の 車 輪 此 ごと 其 膏 此 後 割 其  
 一 一 妻 小 あり ば 國 人 打 ち り 其 膏 此 後 割 其  
 油 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 教 十 竹 あり 再 び 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 又 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 腰 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏

一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 の 膏 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 其 膏 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 笑 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 一 一 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 あり 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏  
 人 此 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏 此 後 割 其 膏



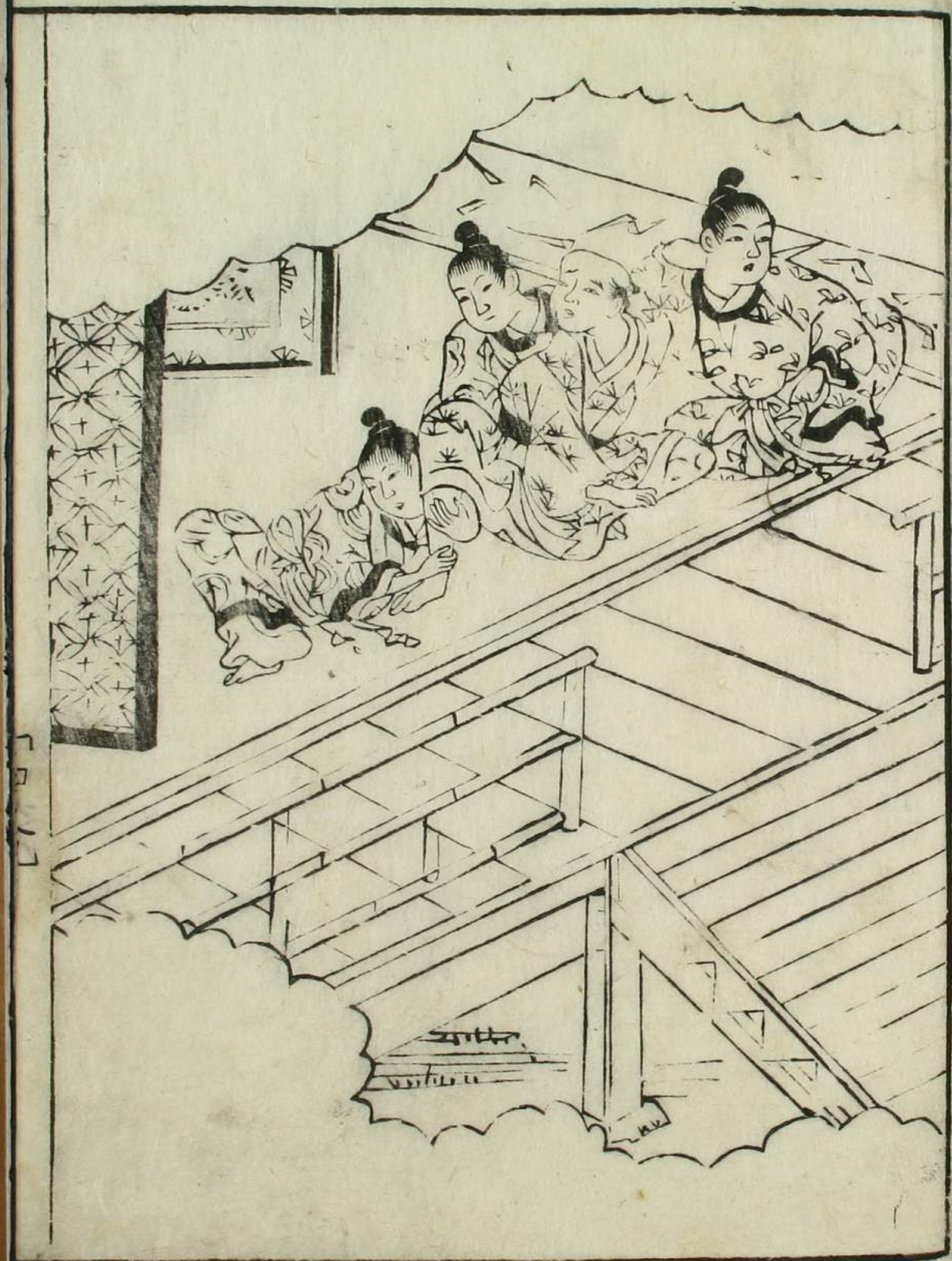




若しとてとく不老不死此業此徳を以てけしむにせよ  
 取らんとし何れにせよたまたま命をさむお世ハヤし  
 して五穀よく美のり衣被汝のあり教吾も女を  
 して此事あまが華若紙をたぬめよと紙のく他  
 ろ同奉れを馬御之此すに万事とてまの衣経度  
 世神よとふ命とてうりちよまど生他大智新傳  
 了んたよあつとくをばよく穴かこぬ之考の由  
 とよがりのつてせが志うくばまよの事ハ  
 教一トされん國の強をすまで此はまをさむ

海の中より一見のこさんとせが女がどれゆ  
 此のまがごとく大業はとあし今一およごとく  
 と表に目おはして三月あつにわ女人清風を  
 小なり飛トグうくとあつらこまがわつせし女  
 玉かりのまも下りの目奉ままの清國をなご  
 も一ゆくあまを掃く飛し一五日後のこさんと涙を  
 あがりまこれ海路のくこ望にわつらこまが  
 つじま和莊まのこして美那ち事もわくは方と  
 あがめくいのらわくつゆまことあく世計り女姓





和四之六











安永三甲午年正月吉日

三都書林

江戸本石町十軒店

山崎金兵衛

大坂心齋橋安堂寺町

大野木市兵衛

京寺町通錦小路下町

錢屋利兵衛

Handwritten notes at the bottom left corner.







